

父親像の探求

——ハリー・ポッターの場合

大和久 吏 恵

1. はじめに

「ハリー・ポッター」¹ シリーズは、J.K. ローリング (Joanne Kathleen Rowling 1965～) によって書かれた物語である。第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』(以降『賢者の石』)は1997年にブルームズベリー社より出版され、第7巻『ハリー・ポッターと死の秘宝』(以降『死の秘宝』)が2007年に出版されたことで完結した。この物語は主人公ハリーが1歳の時から始まり、主にhogwarts魔法魔術学校に在籍する11歳から17歳までの7年間にわたる成長を描いたものである。「ハリー・ポッター」シリーズは世界200以上の地域で出版、80以上の言語に翻訳され、全7巻の発行部数は6億部を超えるという (PR TIMES)。のちにワーナー・ブラザーズが2001年に『賢者の石』を映画化し、2011年に『ハリー・ポッターと死の秘宝 PART 2』をリリースしたことで、映画においてもハリーの物語は完結した。

その後、2016年7月に舞台劇『ハリー・ポッターと呪いの子』(以降『呪いの子』)がロンドンで上演された²。これはハリーがhogwarts魔法魔術学校を卒業した19年後にあたる世界を描いたものである。脚本も同年に発売され、「ハリー・ポッター」シリーズの第8巻として扱われている³。日本では2022年より東京で上演され、公演期間の延長を重ねている⁴。

小説 (脚本)、映画、舞台の他、2013年には映画の世界が体験できるアトラクションがロンドン郊外に誕生した (Warner Bro. Studio Tour London)。日本でも2023年に同施設が東京で開業され人気を博している。

「ハリー・ポッター」の世界が一度「完結」しても拡張が止まらない理由は以前にも少し触れたが (大和久)、Blackが指摘するように、ハリーが願望と対峙する場面や恐怖の体験を通して、読者もまた一読だけでは解決

しきれない自分自身の願望や恐怖と向き合うよう誘導されることも挙げられる。ゆえに小説は再読され、映画や舞台で視覚化され、アトラクションも造られるなど、人々の興味を惹き続けるのである。

ところで、ハリーの願望や恐怖とは何だろうか。一般読者と同様に、ハリーも年齢や環境に応じて様々な願望が湧き恐怖を体験するが、最初の記憶－両親がハリーを護って亡くなる記憶－がハリーに強い影響を与えているのは疑いがないだろう。作品中にその場面が繰り返し現れる度に、ハリーは両親を殺した圧倒的な力に怯える。しかし一方で、彼らがどのような存在であったのか思慕を募らせ執着していく。そこで本論では主に父親の存在に焦点を絞り、ハリーの父親像の探求をテーマとする。彼は1歳以降、父が実存しないため、父親とは何かを関係者から探し求める。探求の結果がハリーに何を学ばせどのような行動をとらせるのか、作品に沿って考察していきたい。

本論では主に「ハリー・ポッター」シリーズの小説第1～7巻に描かれている世界を元に論じ、『呪いの子』は19年後の答え合わせとして用いることとする。ハリーが存在するより前の世界が描かれた「ファンタスティック・ビースト」シリーズは本論では扱わない。また「ハリー・ポッター」シリーズの引用は原書（英語版）から行いそのページ数を記す。必要な部分には拙訳を用いる。タイトルも略称で記すこととする⁵。

2. 両親不在の養育環境

2.1 遺児と孤児

ハリーの父親像の探求を論じる前に、彼の立場と関係者について整理する。上述のようにハリーは1歳で両親が亡くなっている。定義によると「両親が共に死亡していることや行方不明であること、また両親がわからない場合や近親者がいない、親類など養育してくれる保護者がいなく、身寄りのない未成年者が孤児」であり「祖父母や親類により保護され養育されている場合は（中略）遺児」と見なされる（ボランティアプラットフォーム）。この定義だとハリーは遺児に分類される。

ハリーの関係者には、彼と同様に両親が健在する家庭で養育されていな

い登場人物がいる。それは Friis の指摘にもあるように、友人のネビル・ロングボトムと宿敵のヴォルデモートである。ネビルの両親は存在するが、凄惨な拷問をかけられた末、廃人となり入院中である。祖母が彼の養育を行っている状況を鑑みると、ネビルは遺児に分類されるであろう。また、ネビルはハリーと誕生日が1日違いで「七番目の月が死にゆく時に生まれ」ているため、実はトレローニーの闇の帝王を倒す存在の予言に当てはまる人物でもある (*The Order of the Phoenix*, 774)。他方、ヴォルデモートの両親は、父が身重の母を棄て母は彼を孤児院で出産した直後に死亡した。頼れる親類はおらず養育は孤児院でなされたため、ヴォルデモートは孤児に分類される。

表1 養育環境の違い

	誕生日	父	母	養育者	分類	魔法使い
ハリー	1980年 7月31日	1歳の時に死亡		伯母	遺児	父母 ○
ネビル	1980年 7月30日	廃人となり入院中		祖母	遺児	父母 ○
ヴォルデモート	1926年 12月31日	身重の妻を棄てる	ヴォルデモート 出産直後に死亡	孤児院	孤児	父× 母○

表1にあるように、ハリーの両親は1歳の時に死亡、ネビルの両親は存命だが父母として機能しない、ヴォルデモートの父は38歳まで生きるが息子は認知せず、母は出産直後に死亡している。ハリーとネビルは親族に育てられるが、ヴォルデモートは孤児院で育てられる。

2.2 ハリーの場合

ハリーの父（ジェイムズ）と母（リリー）は魔法使いである。彼らが亡くなった際にハリーはダンブルドアたちによって保護され、母の姉ペチュニア・ダーズリーに預けられる。筆者はダーズリー家におけるハリーの育成環境について述べたことがあるが（大和久）、ダーズリー家がどのような家庭かは、ダンブルドアとマクゴナガルの会話でも推測できる。

‘I’ve come to bring Harry to his aunt and uncle. They’re the only family he has left now.’

‘You don’t mean – you *can’t* mean the people who live *here*?’…

‘You couldn’t find two people who are less like us. And they’ve got this son – I saw him kicking his mother all the way up the street, screaming for sweets. Harry Potter come and live here! (Philosopher’s Stone, 14)

「私はハリーを伯母と伯父のところに連れてくるために来たのだよ。彼らはハリーを残していける唯一の家族だからね」

「ここに住んでいる人たちのことを言っているのではないですよね」
(中略)

「私たちとこれほど似ていない2人なんて見つけれられないでしょう。彼らには赤ちゃんがいて、その子は母親をこの道のところまでずっと蹴り続け、お菓子を求めて叫んでいたのですよ。ハリー・ポッターがこんなところで暮らすなんて！」

ダーズリー家は3人も人間で、魔法に対する異常なほどの恐れと嫌悪を持っている。ハリーには両親が魔法使いで敵の魔法攻撃からハリーを護って亡くなったと真実の死亡理由を伝えず、ただ交通事故で亡くなったと伝え、両親について質問することも禁止している。ハリーが自分を人間と認識して育っていくのは当然である。

のちに明らかになるのは、ダーズリー夫妻は息子のダドリーを溺愛するだけで、いどこにあたる同年齢のハリーには最低限の衣食住しか与えない。それなのに彼がダドリーを羨む描写がないのは、11歳になるまでに低い自己肯定感を植え付けられ、家族の一員というよりも迷惑な居候であると諦めの境地に達しているためである。しかし目の前で見るダーズリー家の家庭の団欒は、自分もジェームズやリリーと分かち合うはずだったと思いを馳せることもある。

2.3 ネビルの場合

ネビルの父（フランク）と母（アリス）も魔法使いである。1981年にヴォルデモートと戦った際、手下から凄惨な拷問を受けたせいで精神に異常をきたして入院中である。同じく魔法使いである祖母（オーガスタ）は息子夫婦を誇りに思っており、ネビルもまた、自分のことを認識してはもらえないが両親を尊敬している。

ネビルは祖母に厳しく育てられ、自信が持てず気弱な性格のまま Hogwarts 魔法魔術学校へ入学する。さまざまな失敗や虐めも体験するが、ハリーたちと育んだ友情が自信となり、努力家でもあることから、強力な魔法使いへと成長する。薬草に関して興味と才能があり、成人すると Hogwarts の「薬草学」教授に就任する。一方で入院中の両親のことはハリーたちにも明かさず、他者を羨むこともなく、一人で父母の不在の寂しさを耐える強さも持ち合わせている。

2.4 ヴォルデモート（本名：トム・マールヴォォロ・リドル）の場合

ヴォルデモートの父（トム）は人間で、母（メローピー）は魔法使いである。メローピーは純血魔法使いの家系を絶やさぬよう魔法使いと結婚すること以外に選択肢はないと家族から命令されている。しかし自分を虐げる彼らに嫌気がさし、地主の息子であるトムに魔法をかけて自分と駆け落ちさせる。ヴォルデモートを身籠ったことで息子への愛情が湧くだろうとトムの魔法を解くが、魔法で愛情が定着することはなく、トムに棄てられる。孤児院でヴォルデモートを出産すると、自分を生かす魔法を使おうともせずに亡くなる。

ヴォルデモートは孤児院によって世話をされる。孤児院は彼が魔法使いであることに気づかず、不可解なことがあっても放任する⁶。このように、彼は親や親に準ずる特定の誰かから愛情を受けず、その場面も見ずに育ったため、「愛情や同情のような感情、友達を作ることが理解」（ハリー・ポッター Wiki）できない。

ヴォルデモートは自分と同じ名前（トム）を持つ人間の父親を憎み、父が38歳の時に自宅を訪れ同居していた祖父母もろとも殺害する。ヴォル

デモートは半純血⁷なのだが、名前を自ら変えることでその事実を隠し、純血であることへ執拗に拘泥する。

3. 父性を示す 4 人のモデル

3.1 エディプスコンプレックスとトーテム饗宴

父親と息子の関係を論じるにあたり、エディプスコンプレックスとトーテム饗宴の概念に触れておきたい。フロイトの提唱するエディプスコンプレックスとは「息子であるという状況から生まれてくる二つの極端な願望、すなわち父を殺すことと母を妻とする」（フロイト、1981）ことである。息子は母を娶りたい欲求から父親殺しを考える。しかし父親殺しを企てれば父親から去勢される不安を抱く。この不安のため「性的欲望を禁止し、懲罰を与える父親を内面に取り込むことで超自我を形成する。超自我は、良心や倫理観、道徳観などにもつながってゆく」（網谷）。エディプスコンプレックスが社会的・心理的に適切な形で克服されないと、「人間は神経症に罹患したり、文化生活の中で出所の分からぬ罪責感に苦しめられたりする」（網谷）。その後フロイトは『トーテムとタブー』の中で、父親を殺害しその肉を食べることで父親を内在化した息子たちが、父親への愛情、後悔、罪悪感から、また兄弟組織を維持するために近親性交を禁じることを述べている（フロイト、2009）。これが「社会組織、道徳的禁制、そして宗教の端緒として機能するようになる」（網谷）。

3.2 父性を示す 4 人のモデル

ハリーは両親が実在しない。ダーズリー家で養育されてはいるが、いとこ（ダドリー）が伯父（バーノン）や伯母（ペチュニア）と築いている親子関係から外されているため、成長過程においてエディプスコンプレックスおよびトーテム饗宴の概念を実際に経験することができない。

また、ダーズリー家ではハリーの両親を話題にすることが禁じられているため、ジェームズとリリーがどのような人物だったか知る術がない。時が経ち、ハリーは11歳の誕生日に自分が魔法使いであることを知らされる。hogwarts魔法魔術学校へ入学すると、少しずつ両親の人となりを知るこ

ととなる。ハリーに両親の話をするのはhogwartsの先生たち、森番のハグリッド、友人の父兄である。ここでは Carmeli が「父性を示す 4 人のモデル」の中で挙げている 4 人の男性に焦点を当て、ハリーの父親像を論じていくことにする。

表 2 「父性を示す 4 人のモデル」となる人物

	ハリーとの関係	ジェイムズとの関係	家族との関係	その他
リーマス・ルーピン	先生	親友	良い	狼人間にされたため、生計を立てるのが困難
シリウス・ブラック	名付け親	親友	悪い	ブラック家で一人だけグリフィンドール寮所属
アルバス・ダンブルドア	(校長) 先生	先生	あまり良くない	妹を殺したかもしれない罪に苦しむ
セルプス・スネイプ	先生	敵対	悪い	リリーへの思慕のためジェイムズから距離をおけない

3.2.1 リーマス・ルーピン

ルーピンは『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』（以降『アズカバンの囚人』）から登場し、hogwarts特急のコンパートメントで吸魂鬼（デイメンター）に襲われたハリーを助ける。身なりはみすぼらしかったが「闇の魔術に対する防衛術」の教授だと分かり、ハリーは授業が始まる前から彼を信頼する。ルーピンはコミュニケーション能力が高く、幽霊を適当にあしらうウィットもあり、生徒への観察眼も優れている。よって生徒からの評価も高く信頼を勝ち得ている。

ハリーには吸魂鬼を撃退できるよう守護霊の出し方の個人レッスンを受ける。授業での気遣いとともハリーに対して頼りになる父性を示してくれた人物でもある。なおハリーの守護霊は「牡鹿」であり、父ジェイムズと同種である。さらにヴォルデモートの復活に伴い不死鳥の騎士団が再集結されると、「子供たちを信頼し、ある程度情報を与えて自分で判断させることが重要だと考え」⁸（大事典）反対するモリーを説得して、ハリーた

ちに魔法界全体の状況や騎士団についての知識を与える。

ジェイムズとルーピン、シリウス、ペティグリューはグリフィンボール寮の同級生で親友だった。ジェイムズは同じく同級生であるスリザリン寮のスネイプが「闇の魔術」に傾倒するのをよく思わず、隙があればシリウスと一緒に彼を攻撃した。しかしルーピンはその虐め行為に付き合わず静観する立場を取っていた。

ルーピンの家族関係は良好だったが、子供時代に狼人間に噛まれて狼人間になってしまう。満月時には狼に変身する辛さに苛まれ、狼になっている間は人を襲うため成人後はまともな職に就けず貧困の中で暮らしている。ダンブルドアは当時から彼の事情を知ったうえでhogwartsに入学させ、必要時には先生の職を与える。

3.2.2 シリウス・ブラック

シリウスはルーピンと同様『アズカバンの囚人』から登場する。死神犬を想起させる黒い犬の姿でハリーの前に現れ、何も知らないハリーを脅かす。人間界でも魔法界でも凶悪な脱獄囚としてシリウスは恐れられ、彼と接触しないようハリーは周囲の大人たちから説得される。

シリウスが人間の姿に戻ってハリーと出会うのは、ホグズミードにある「叫びの屋敷」でかつては親友だった裏切者のペティグリューを追い詰める場面である。シリウス、ジェイムズ、ルーピン、ペティグリューが、フレッドとジョージからハリーがもらった魔法の地図の作成者であったことが明かされる。ハリーにとって一番の福音は、ヴォルデモートに両親の隠れ場所を教えた犯人だと思っていたシリウスが、実は自分の名付け親であり、一緒に住もうかと提案してくれたことである。

シリウスは文字通り親代わりであり、伯父よりもほど父親に近い存在である。ハリーはシリウスから父の話を聞き嬉しく思うとともに、シリウスにも父親の役目を求めるが、シリウスはハリーを子供としてよりも親友ジェイムズの代わりとして見なしてしまう。

'He's not a child!' said Sirius impatiently.

‘He’s not an adult either’ said Mrs Weasley, the colour rising in her cheeks.
‘He’s not James, Sirius!’
‘I’m perfectly clear who he is, thanks, Molly’, said Sirius coldly.
‘I’m not sure you are’ said Mrs Weasley. ‘Sometimes, the way you talk about him, it’s as though you think you’ve got your best friend back!’
...
‘Personally’, said Lupin quietly, ‘I think it better that Harry gets the facts - not all the facts, Molly, but the general picture - from us, rather than a garbled version from ... others.’
(*The Order of the Phoenix*, 82)

「彼 (=ハリー)⁹ は子どもじゃない」とシリウスは苛立ちながら言った。

「彼は大人でもありません」とウィーズリー夫人は言い、その頬には赤みが差していた。「彼はジェームズではないのよ、シリウス！」

「ありがたいことに、私には彼が誰だかはっきり分かっているのだが、モリー」とシリウスが冷淡に言った。

「あなたが分かっているなんて思えない」とウィーズリー夫人が言った。「ときどき、あなたがあの子について話すとき、まるで親友が戻ってきたかのような言い方なのよ！」(中略)

「個人的には」とルーピンが静かに言った。(中略)「私はハリーが事実を知っておいた方がいいと思う—全てではないよ、モリー、でも全体的なことは私たちから聞く方がいい、むしろ他の誰かから歪曲された説明を聞くよりもね」

シリウスは 22 歳の時にペティグリュー殺しの濡れ衣を着せられ、12 年間アズカバンの独房で過ごした。普通の大人として生活する機会を奪われ、社会生活の記憶はジェームズを失った 22 歳の時のまま止まっている。ハリーに会った当初はジェームズの息子として扱うだけの分別を持ち合わせていたが、シリウスとジェームズの絆は深く、徐々にハリーの姿にジェームズを転嫁してしまうことに、ハリーも周囲も戸惑うことがある。

シリウスは家柄や家族に良い思いを持っていなかった。彼は純血主義を貫くブラック家の末裔である。ブラック一族は代々スリザリン寮所属であったにもかかわらず、シリウスは唯一グリフィンドール寮に組み分けされ、さらに純血主義を嫌って家を出た。両親は激怒の末シリウスの名前を家系図から消してしまった。

3.2.3 アルバス・ダンブルドア

ダンブルドアはハリーがホグワーツに入学する前から彼の世話をしている。ハリーを唯一の血縁であるダーズリー家に預けて養育させ、11歳になるとハグリッドを遣わし学校へ入学させる。毎年夏休みになると学校の規則でハリーを含む全生徒を家へ戻す。5年生に上がる夏休みに、ダーズリー家とハリーの関係が修復不能なほどに壊れてパーノンがハリーを追い出そうとすると、ベチュニアに「吠えメール」を送りハリーが17歳で成人するまで家庭に置くことを思い出させる（『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』以降『不死鳥の騎士団』）。

ダンブルドアのハリーへの接し方は、技術を教える教師というよりもメンターと位置付ける方が適しているだろう。「みぞの鏡」に耽るハリーを諭し（『賢者の石』）、トム・リドルの日記帳をルシウスに返すことを理由も聞かずに許可し（『ハリー・ポッターと秘密の部屋』以降『秘密の部屋』）、シリウスとバックビークを逃すヒントを与える（『アズカバンの囚人』）。ハリーに対して常に全幅の信頼を持ち、「ヴォルデモートを見た」というハリーの言葉を疑わない（『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』以降『炎のゴブレット』）。ヴォルデモートとの決戦に備えて、魂の指導者として自分や他人の記憶をハリーに見せ、分霊箱（ホークラックス）を探す旅に連れて行くなど、極めて個人的な指導も行う。しかし『不死鳥の騎士団』から、ハリーがダンブルドアに抱いている「全能のイメージであるはずの理想像」（Carmeli）が崩れ始める。ダンブルドアは徐々にハリーと距離を置くようになり、ハリーは困ったときにはいつも自分を救ってくれた彼が頻繁に不在になることに不満や疑念を抱く。ダンブルドアにとっては「ヴォルデモートがハリーに対する彼の弱さを利用するかもしれないか

らだけでなく、自分の愛が他人に破壊的な結果をもたらすという経験を踏まえて」(Carmeli)の行為であるが、ハリーには理解することができない。

近代で最も偉大な魔法使いと崇められるアルバスだが、家族関係はあまり良くない。妹(アリアナ)が6歳のときに人間の子供たちに襲われ精神を病んでしまう。父親は彼らに復讐しアズカバンに収監される。やがて妹は魔法を制御できずに母親を殺してしまう。ホグワーツを卒業したダンブルドアは妹の世話を担当するが、自分と同等の優秀さを持ち得たグリンデルバルドとの交流に耽り彼女の世話が疎かになる。弟(アバーフォース)がそれ指摘するとグリンデルバルドが弟に磔の呪文をかける。アルバスは弟をかばい、妹も二人の兄を助けようとしたが、誰かの呪文が命中して落命する。アバーフォースは卒業後に居酒屋の店主となり校長となったアルバスとは距離を置くが、アルバス亡きあとはハリーを護るために尽力する。

3.2.4 セブルス・スネイプ

スネイプは『賢者の石』から登場し、最初の授業時からハリーを虐めだす。ハリーに罰を与えることを喜びとするため、ハリーは彼に対して敵意を抱く。しかし、クィレルの呪いを躲す呪文を唱えたり(『賢者の石』)、ルーピンを狼男に変身させない薬を調合したり(『アズカバンの囚人』)、半純血のプリンスとして期せずしてハリーに「魔法薬学」の知恵を授けたり(『謎のプリンス』)するなど、スネイプは陰ながらハリーの面倒を見る役回りをする。優秀な魔法使いだが、陰気な風貌と気質を持ち、かつてヴォルデモートの手下(死喰い人)だったことから、不死鳥の騎士団の一人であっても常に疑いの目で見られている。

スネイプは父が人間で母が魔法使いである。家は貧困で父母の喧嘩は絶えず、孤独な子供時代を過ごした。近所の幼馴染であるリリーに彼女が自分と同様に魔法使いであることを教え、彼女への愛情を募らせるが、コミュニケーション能力が低すぎて望む関係を築くことができない。ホグワーツに入学すると、リリーはグリフィンボール寮に、スネイプはスリザリン寮に所属する。グリフィンボール寮には同級生としてジェイムズやシリウスたちもいる。リリーは彼らと行動する機会が多くなるが幼馴染との

友情も持ち続けている。ある時スネイプはジェームズらに虐められ下着姿を晒される辱めを受ける。リリーが仲裁に入ると彼女に対して「穢れた血」と暴言を吐いてしまい、リリーから決別される（『謎のプリンス』）。

スネイプは卒業後に死喰い人となったが、リリーがヴォルデモートを倒す子供が宿しているという予言を知ると、ヴォルデモートがリリーを殺す前に彼女を救う方法を求めにダンブルドアへ直訴する。ダンブルドアは見返りに「全て（‘Anything’）」を差し出すと申し出た彼へ二重スパイを命じ、リリーたちを安全に隠す手配を施す。ペティグリューによる裏切りのためリリーは亡くなったが子供は生き残る。ダンブルドアは予言を受けたリリーの血を受け継ぐ子供も護るようにスネイプへ命令する。二重スパイを続けながらハリーを護ってきたスネイプだが、ヴォルデモートを倒すためにはハリーも死ななければならないと知ると「死ぬための子供を育ててきたのか」とダンブルドアに抗議する。

‘But this is touching, Severus,’ said Dumbledore seriously. ‘Have you grown to care for the boy, after all?’

‘For him?’ shouted Snape. ‘Expecto patronum!’

From the tip of his wand burst the silver doe: …

‘After all this time?’

‘Always,’ said Snape.

(*The Deathly Hallows*, 561)

「しかし、感動的だな、セブルス」とダンブルドアは真顔で言った。

「結局、あの子に愛情を持つようになったのだな？」

「彼に？」スネイプが叫んだ。「エクスペクト・パトロナム！」

スネイプの杖先から、銀色の雌鹿が飛び出した（中略）

「これほどの年月が、経ってもなのか？」

「永遠に」とスネイプが言った。

雌鹿はリリーの守護霊だった。彼女の亡きあと17年経っても愛の深さは変わらず、スネイプも同じ守護霊を出すようになっていた¹⁰。

4. 考察

ここまで、「両親不在の育成環境」ではネビルとヴォルデモートに、「父性を示す4人のモデル」ではルーピン、シリウス、ダンブルドア、スネイプについて言及してきた。ハリーはこれらの関係者からどのような父親像を探求したのだろうか。

まずハリーもネビルもヴォルデモートも「自分たちが生き延びて成功する能力があることを証明するために、もっと何か、もっと良い何かになる」と駆り立てられる(Friis)。ハリーはダーズリー家で捻くれることもなく成長し、良い素質を存分に発揮し物語のヒーローになる。自分に与えられた試練も恵まれた魔法の力と周囲の協力で乗り越える。ネビルは厳しい祖母の元で委縮しがちであり控えめで内向的であるが、物語の中で課題を経験しながら成長していく。特にダンブルドア軍団に入ってから成長は目覚ましい。一方ヴォルデモートは、自分の孤独で惨めな出自を原点とし、怒りと魔法の力を利用して他者を分断させる冷酷な殺人者に成長する。

ハリーが信頼する大人たち—ハグリッドをはじめシリウスやルーピン—がジェイムズのことを誉めそやしていたため、ハリーは彼らの言葉からジェイムズを「理想の父親」と崇めていた。しかしハリーはスネイプの記憶からジェイムズが彼にしていた虐めの場面を見てしまう(『不死鳥の騎士団』)。ダーズリー家で虐められた経験を持つハリーにはスネイプの屈辱が理解でき、理想の父親のはずだったジェイムズが別の面を持っていたことに失望し懐疑心を抱く。更に、名付け親のシリウスもその虐めに加担していたし、ルーピンも虐めを止めることはなかったことも、ハリーを失望させた。リリーだけがスネイプを庇うために彼らに抗議した。ハリーはそんなジェイムズと結婚したリリーにも疑念を抱くが、二人は亡くなっているため明確な解答は得られない。この虐めの場面が、父に気に入られないと酷い目に遭う恐怖(去勢)や、愛する母を父から引き離せない無力さ(抑圧)を無意識のうちにハリーに植え付ける。ハリーは実際に父母と対峙できないため、エディプスコンプレックスを社会的・心理的に適切な形で克服するのに時間がかかる。ハリーは自分の父親像の複雑さを受け入れて愛さなければならない、そして理想化を手放さなければならないのであ

る (Carmelil)。第1～4巻に見られたハリーの陽気さは鳴りを潜め、『不死鳥の騎士団』終盤から内向的な性質が随所に現れる。ヴォルデモートが頻繁に心に入り込むようになり、事情が理解できない周囲には「神経症」と受けとられる時期とも一致する。

ダンブルドアはヴォルデモートが恐れた唯一の人物であり、ヴォルデモートが率いる悪の陣営との戦いに生涯をかけた。リリーの護りの魔法でハリーが助かると、ハリーの存在がヴォルデモートを倒す武器であることに気づき、両親亡きあとからずっとハリーの成長過程に目を光らせている。事情を知らないハリーにとって、ダンブルドアはメンターであり最も偉大な庇護者で、当初は尊敬の念のみを抱いていた。やがて『不死鳥の騎士団』から、ダンブルドアはスネイプから閉心術の個人授業を受けるようハリーに指示したり、自分との個人授業では他者の記憶をハリーに見せヴォルデモートと戦う準備をさせるようになる。ダンブルドアは自分の計画をハリーに明かすことなくこれらの授業を行い、ハリーと距離を置くような行動を取るため、ハリーは彼に対して徐々にアンビヴァレントな感情を抱くようになる。

『謎のプリンス』でダンブルドアは亡くなる。ハリーがダンブルドアを殺めたのではないが、ハリーを護るが故の死のため、広義に取ればハリーがダンブルドアを「内在化」したと考えられる。ハリーはダンブルドアに対する「愛情」に加え、もっと彼を信じ教を素直に受けておけばよかったという「後悔」や「罪悪感」を持つ。その結果「最後のそして最も偉大な庇護者が亡くなったことで、彼はかつてないほど孤独になった」(*The Half-Blood Prince*, 537)。ハリーは腹を括り、ダンブルドアに託された分霊箱を破壊する旅に出る決意を固める。

スネイプはハリーと出会った瞬間から彼に辛く当たり、ハリーから憎まれる対象となる。周囲も彼のハリーに対する態度が辛辣すぎると感じ、ルーピンやムーディ¹¹らホグワーツの先生がスネイプの叱責からハリーを逃れさせる場面もある。スネイプにとってハリーは自分を辱めたジェイムズの息子であると同時に愛するリリーの息子でもある。ダンブルドアへリリーの安全を託す引き換え条件がハリーを護ることだったため、彼は愛憎

入り混じる感情を抑えつつ影からハリーを護り続ける。全てリリーへの愛情による行為なのだがダンブルドア以外にそれを明かすことはなく、ハリーはスネイプの臨終の記憶から初めて真実を知る。ハリーは「なぜ死にゆく男に自分が近づいているのかわからなかった」(*The Deathly Hallows*, 537) と述べるが、深層心理ではスネイプが受けていた虐めの辛さに共感できたこと、ジェイムズが彼にしたことを申し訳なく思っていたこと、何度かスネイプに救われてきた経験などが、彼にそう行動させたのだろう。そうでなければハリーはとスネイプの真実を知ることはできず、ヴォルデモートとの最終決戦に立ち向かえない。

最後に、ハリーはヴォルデモートからどのような父親像を得たのだろうか。これまで述べてきたことを鑑みると、リリーを含めハリーを世話し愛情を与えてきた人物全てを殺害することで、ハリーの(性的ではないが)愛情享受欲求を遮断し、強力な魔力で懲罰を与える父親像がヴォルデモートに投影できる。命を賭して自分を護ってくれた人々の協力とダンブルドアの緻密な作戦で、ハリーはヴォルデモートを倒す。エディプスコンプレックスの対象になったヴォルデモートを「内在化」することで、父親像が庇護や慈愛といった理想的な面だけではなく、悪意や恐怖や力など暗黒な面からも構造されていることを身をもって知ったのである。

5. おわりに

本論のテーマはハリーの父親像の探求であった。ハリーはトレローニーの予言「一方が生きる限り、他方は生きられぬ」を覆すことなく、ヴォルデモートとの戦いに勝って生き延びた。父ジェイムズに対しては、理想だけではなく現実の姿も受け入れるのが肝要だと徐々に理解した。これらの出来事はハリーが紆余曲折の末にエディプスコンプレックスを克服したことを示し、文字通り成人するために通過すべきイニシエーションでもあったのだ。

今回取り挙げた男性の中で父になった(結婚した)のは、ハリーを除くとネビルとルーピンだけである。つまり元来親子関係が良かった人物である。そしてハリーが結婚したのは自分を補完してくれる女性—両親が実在

し、伝統ある魔法使い一家の出で魔法界文化に詳しい、ハリーに欠けているものを持ち合わせている—ジニーである。ハリーはジニーとの間に3人の子供を授かるが、『呪いの子』では次男との関係に苦慮する姿が描かれる。ハリー自身が理想的でも完璧でもない父親となっている。

今回は父親像のみに焦点を当て、探求の結果がハリーに何を学ばせどのような行動をとらせるのかを見てきた。今後の課題として、母親および母親像がハリーにどのような影響を与えているのか研究を続けていきたい。

[謝辞] 学部4年次に鶴見先生の授業を履修していなければ、私は研究者になっていませんでした。節目の折にご指導くださりありがとうございますございました。

註

- 1 登場人物を示す場合はそのまま、小説全体を指す場合は「ハリー・ポッター」のように表記する。
- 2 J.K. ローリング、ジョン・ティファニー、ジャック・ソーンによる原作をもとにソーンが脚本を書いた舞台劇。2024年現在も上演中。
- 3 2024年現在では映画化は未定。
- 4 2024年現在では2025年6月末日まで上演予定となっている。
- 5 第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』→『賢者の石』、第6巻『ハリー・ポッターと謎のプリンス』→『謎のプリンス』、5 *Harry Potter and the Order of the Phoenix* → *The Order of the Phoenix* など。
- 6 本論では現実世界の孤児院の育成環境ではなく、あくまでも「ハリー・ポッター」の世界における孤児院について述べていることを明記する。
- 7 父母両者が魔法使い＝純血、父母のどちらかが人間＝半純血と定義されている。
- 8 3.2.2 シリウス・ブラック項内の引用を参照のこと。
- 9 筆者補足
- 10 守護霊は「精神的な動揺や強い衝撃で形が変わる」ことがある（大辞典）。守護霊を出すには一番幸せだった記憶を思い出しそれに集中する必要がある。
- 11 当時、パーティ・クラウチ・ジュニアがムーディに变身していた。

参考文献

網谷優司（2021）「フロイト理論におけるエディプスコンプレックス概念の形成と変遷」『研究報告』34, 21-39.

- Black, S., 2003. The Magic of Harry Potter: Symbols and Heroes of Fantasy, *Children's Literature in Education*, Vol. 43, No. 3, 237-247.
- Carmelil, R., 2009. Four Models of Fatherhood: Paternal Contributors to Harry Potter's Psychological Development, in *Harry Potter's World Wide Influence*, ed. Diana Patterson, 11-34. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- ELLE JAPAN (2020) 「総額資産は 600 億円超！『ハリー・ポッター』の作者、J.K. ローリングの半生を数字で検証」
<https://www.elle.com/jp/culture/celebgossip/g33452707/jkrowling-lifestyle-200731-hns/>
 (Retrieved August 31, 2024)
- Friis, C., 2013. Abandoned Children in Literature: The Orphans in JK Rowling's Harry Potter and the Philosopher's Stone, Lund University, Degree essay in English Literature Spring Semester 2013.
- Harry Potter WIKI, 2024, "Wool's Orpheanage".
<https://harrypotter.fandom.com/ja/wiki/%E3%82%A6%E3%83%BC%E3%83%AB%E5%AD%A4%E5%85%90%E9%99%A2> (Retrieved September 5, 2024)
- 大和久吏恵 (2023) 「ハリー・ポッターの育成環境に関する試論－hogwarts魔法魔術学校入学前まで－」『湘南英文学』第 16 号, 15-28.
- PR TIMES (2022) 「ワーナーブラザーズ スタジオツア－東京－メイキング・オブ・ハリー・ポッター－ 2023 年 “夏” 開業決定！」
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000002.000089380.html> (Retrieved September 5, 2024)
- Rowling, J.K., 2014. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, London: Bloomsbury Children's Books. [First published in 1997]
- 2014. *Harry Potter and the Chamber of Secrets*, London: Bloomsbury Children's Books. [First published in 1998]
- 2014. *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, London: Bloomsbury Children's Books. [First published in 1999]
- 2014. *Harry Potter and the Goblet of Fire*, London: Bloomsbury Children's Books. [First published in 2000]
- 2014. *Harry Potter and the Order of the Phoenix*, London: Bloomsbury Children's Books. [First published in 2003]
- 2014. *Harry Potter and the Half-Blood Prince*, London: Bloomsbury Children's Books. [First published in 2005]
- 2014. *Harry Potter and the Deathly Hallows*, London: Bloomsbury Children's Books. [First published in 2007]
- Rowling, J.K., Tiffany, J. & Thorne, J. 2017. *Harry Potter and the Cursed Child*, London: Sphere.
- ジグムント・フロイト (懸田克躬, 高橋義孝訳) (1981) 『フロイト著作集 1 精神分析入門 (正・続)』京都: 人文書院
- (須藤訓任, 門脇健訳) (2009) 『フロイト全集 12』東京: 岩波書店
- 寺島久美子 (2011) 『ハリー・ポッター大事典Ⅱ—1 巻から 7 巻までを読むために—』東京:

原書房

ボランティアプラットフォーム (2004) 「孤児院」

<https://volunteer-platform.org/words/others/orphanage/> (Retrieved September 5, 2024)